

『稲葉
佳景
無駄
安留記』

調査報告

（八東郡篇）

はじめに

『無駄安留記』は安政五年（一八五八）にいったん成立し、明治一〇年（一八七七）ごろ現在の形になった地誌である。著者は米逸処という商人とされ、現在の鳥取県東部にあたる因幡国の八郡、邑美郡・岩井郡・法美郡・高草郡・気多郡・八上郡・八東郡・智頭郡の景勝地や旧蹟などについての文章、絵、和歌あるいは狂歌が記載されている。

今年度は、因幡国東部に存在した八東郡について調査を行った。八東郡は、若桜町・旧郡家町・旧船岡町・旧八東町にあたり、現在は平成一七年の合併により八頭郡の若桜町・八頭町となっている。調査方法は本文と絵、狂歌、和歌の解読と現地調査、『因幡志』など他の地誌との比較である。報告する名所は、①峯寺薬師堂、②竹石、③山崎算盤橋、④若桜驛竜徳寺、⑤屯倉弁財天巖、⑥次澄山中不動岩、⑦窟堂である。

これらの名所は若桜街道に沿って存在し、著者は若桜街道を通って名所をまわっていたことが分かる。若桜街道は、鳥取県鳥取市と若桜町を結ぶ旧街道で、現在では国道二九号として整備されている。その道路を私たちも通りながら、著者米逸処が見た景色を調査してきた。長い歴史の中で、著者が描いた景色とは少し変わっていた場所ももちろんあった。しかし、私たちはこの調査をすることによって著者が見た景色を感じることが出来た。一五〇年以上も昔の人とつながることが出来たということだ。この報告書によって、同じ経験を多くの人に味わっていただけたら幸いである。

（深内 くるみ）



③ 山寄算盤橋

④ 若桜驛龍徳寺

⑤ 屯倉弁財天巖

⑥ 次澄山中不動巖

⑦ 窟堂

若桜町



鳥取市

鳥取市

① 峯寺薬師堂

八頭町

② 竹石

峯寺薬師堂

峯寺薬師堂についての無駄安留記本文は次のようにある。

同 峯寺薬師堂 宝来山慈性院持

衆眼病を祈って靈驗あり諸病を祈るなり

これを現代語訳すると、「同じく峯寺薬師堂。宝来山慈性院持ち。人々が眼病が治るように祈り靈驗がある。様々な病気が治るようにも祈るのである」となる。

峯寺薬師堂は、鳥取県八頭町の上峰寺村と下峰寺村の境の山上にあり、「峰の薬師」と通称される。本尊は薬師如来（南北朝時代）で、両脇立は日光月光菩薩（室町時代）である。『峰の薬師』（前土居一泰著、一九八一年）によると、聖武天皇のとき、天皇の命により全国的に多くの寺が建立されたが、峯寺薬師堂もその中の一つで、「生峰寺」と呼ばれていたという。しかし、いつから「生峰寺」と呼ばれて、いつ「峯寺薬師堂」と呼ばれ始めたのか、という点については今回の調査では調べることができなかった。また、『峰の薬師』に、峯寺薬師堂は、豊臣秀吉が市場城（郡家町市場）を攻めた際に何度か火災にあい、現在のものは幕末期に再建されたものだという記載があった。しかし、戦国時代に火災にあい、幕末期に再建されるまでどのような形だったのかは資料を探しても見つからなかった。



今回の調査では、峯寺薬師堂について調べるにあたり気になった「宝来山慈性院持」という記述と、絵に描かれている峯寺薬師堂の隣にある鳥居と社と、人々がさまざまな病気を祈ったという信仰について特に注目し、調査を進めた。

一つ目に、「宝来山慈性院持」という記述についてである。この「持」というのは付属施設という意味であるので、峯寺薬師堂は、宝来山慈性院の付属施設にあたるということが分かった。そこで、宝来山慈性院について詳しく調べるために、まず、江戸時代の中ごろに書かれた『因幡志』を調べたところ、下峰寺村についての記述のなかに、「蓬萊山自性院（眞言本寺鳥取金剛院）」というものがあつた。ここで補足であるが、無駄安留記では「慈性院」と書かれているのだが、その他の文献では「自性院」と書かれていたので、今後はその他の文献にならい表記していく。この『因幡志』の記述で、自性院は眞言宗で鳥取城下にある金剛院が本寺ではないかということが推測された。そこで、『鳥取県の地名』で金剛院について調べてみると、鳥取県東部において、金剛院とされる寺は一つしかなく、鳥取市湯所町にある將軍寺がそれにあたるとはならないかという結論に至った。しかし、自性院についてはあまりくわしく載っておらず、更に文献を探したところ、『峰の薬師』に、薬師堂のある山のふもとに建てられたという記述を見つけた。そのことから、無駄安留記に描かれている峯寺薬師堂の絵のなかの、山のふもとにあるお寺のような建物が自性院だと考えた。また、他の文献を調べてみたところ、自性院の建物そのものの絵や写真が載っているものを見つけたことができなかったため、自性院を視覚的に確認することが出来る文献は無駄安留記のみということが考えられる。しかし、『峰の薬師』には、竹藪と参道になつてゐるという自性院の跡地の写真が掲載されており、更に、自性



院は明治十四年に廃寺となりなくなったということも分かった。

次に二つ目の鳥居と社についてである。無駄安留記に描かれている絵をよく見てみると、薬師堂の隣に、鳥居がありその奥には建物もある。これは現在も存在するもので、『鳥取県の地名』などを調べてみると、下峰寺村と上峰寺村の産土神の六所権現であることが分かった。現在は高峰神社と改称されている。更に詳しく文献を調べてみると、『因伯のみやしる』という文献に、高峰神社も峯寺薬師堂と同様に、豊臣秀吉が攻めてきた際に焼失したという記述があった。その後、享保十二年（一七二七）に再建されたということである。大正元年に諸木神社（私都神社）に合祀したが、戦後に分祀奉遷し、現在の高峰神社となっているようである。

続いて、三つ目の信仰についての記述であるが、『因幡志』や『稲場民談記』には、どのような病氣に対して祈っていたのかという具体的な記述を見つけることは出来なかった。しかし、『郡家町誌』には参詣者で賑わったという記述があり、また、『峰の薬師』にも鳥取や岩美からも参詣者がやってきていたとあり、人々が峯寺薬師堂を厚く信仰していたというのは確かである。無駄安留記はその様子を表し、なおかつ具体的な信仰にまで言及している貴重な文献であるといえる。

最後に、狂歌についてみていきたい。

峯寺や薬師の影は木々のめも

虫葉も共に癒るとぞ見る

これを訳すると、「峯寺よ、薬師のおかげで木々の芽（眼）も虫葉（歯）も一緒に治るらしい」となる。実際に、現在の峯寺薬師堂に行ってみる



と、小高い山の上であり、周囲は木々で覆われていた。おそらく作者は、
そういった様子と人々の信仰の様子を歌に表しているのだと思った。

(西村 菜穂)

【参考文献】

前土居一泰『峰の薬師』私家版、一九八一年

鳥取県神社誌編纂委員会(編)『因伯のみやしろ——新修鳥取県神社誌』

鳥取県神社庁、二〇一二年

竹石

今竹市 是往古新興寺の境内なりし由。巉巖深淵にかざしてさもおそろしき景色なり。

右は無駄安留記本文であるが、これを現代語訳すると、「今は竹市という。これは昔、新興寺の境内であつたということだ。険しい岩が深い淵にはりだした、いかにも恐ろしい景色である。」となる。

竹石は八頭町小別府の国道二九号線から八東川をのぞむ場所にあり、現在は竹市岩頭いわだまと呼ばれている。頂上には上ることが出来、二代目荒岩の顕彰墓碑と天保飢饉の供養塔がある。

竹石という地名は、無駄安留記本文には「今竹市」（今は竹市という）とあり、現在でも竹市という地名で残っている。しかし、『因幡志』には「今村を竹市と云は武石の誤謬也」とあり、竹市の前は「武石」であつたことが分かる。『八東町誌』に「武石には『岩壁』の意があり、それが転じて竹市となった」と書いてあるが、『因幡志』に竹市は「竹山は皆矢竹なり」と書いてあり、実際に調査したところ小さく細い竹が生えていたことから、まずは武石の「武」が「竹」に変わり竹石と呼ばれるようになったり、それがまた変化して竹市と呼ばれるようになった、とも考えることができる。

前段に引いたように、『八東町誌』には「武石には『岩壁』の意がある」と書いてある。この地名の由来にもなったと考えられる岩壁の記述が『因幡志』にあった。それによると、「北の岸は頗る絶巖にて、高さ数百尺。」

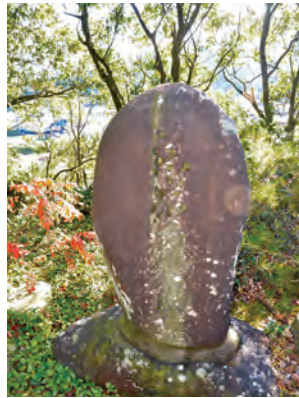
岩壁全貌

山肌の削られた部分まで含めると、高さは電柱の三倍ほどあるように見える





天保飢饉の供養塔「南無妙法蓮華經」



二代目荒岩の顕彰墓碑「荒岩亀之助墓」



岩頭頂上の現在の様子

とあり、百尺とは三〇メートルである。また、『因幡志』にはこの岩壁が新興寺の寺領の境であったとも書いてあった。

まずは、岩壁自体の記述に着目する。現在、岩頭と呼ばれている場所の傍を通っている国道二九号線は以前は現在よりも上の位置を通っていたと聞いた。そのことから、『因幡志』で岩壁と呼ばれた大岩をけずって作られたものではないかと考えられる。山肌の削られた部分から推測すると、国道二九号線に立っている電柱を約一〇メートルと考えてその三倍はあるように思われた。よって、岩壁は現在の国道二九号線から約三〇メートルはあり、それに国道から下の八束川までの高さを含めると、『因幡志』にあるように高さ数百尺はあると思われる。

また、冒頭にも書いたように、岩頭は登れるようになっていたが、その登った頂上は道のようになっていた。そこには、先述したように二代目荒岩の顕彰墓碑と天保飢饉の供養塔が建っていた。顕彰墓碑には「荒岩亀之助墓」とあり、供養塔には「南無妙法蓮華經」とあった。二代目荒岩についての情報はほとんど得ることが出来ず、顕彰墓碑がいつ建てられたのかも分からなかった。また、天保飢饉の供養塔についても建立された時期はつきりとは分からなかった。しかし、鳥取藩内において天保の大飢饉は「申年がしん」と呼ばれていたらしく、その由来は鳥取藩内で飢饉が本格化した年が天保七年（一八三六）申年だったことからきていることが分かった。天保の大飢饉とは、江戸時代の代表的飢饉の一つと言われ、天保四年（一八三三）と天保六年（一八三五）から天保七年（一八三六）の大凶作を頂点として、七カ年に及んだ冷害型の不作により生じた飢饉である。天保四年（一八三三）には関東、東北が主であったが、天保七年（一八三六）から天保八年（一八三七）には北陸、九州、四国を除く全国的規模のものとなった。この冷害の被害は因幡国でも見

られ、天保初年から冷害による凶作が起こっていた。そして、その被害が最も甚大であったのが、天保七年（一八三六）であり、それにより、因幡国にも乞食の発生や米価の急騰、疫病の発生とそれによる多数の死者が発生した。死者の正確な数字は分らないが、『鳥取県史』に、『因府年表』には『凡二万ばかり』と記している」との記述があった。そして、天保十一年（一八四〇）に因幡国の邑美郡覚寺の狼庵の良卯尼という人物が供養塔を建立したということ、天保十四年（一八四三年）に同じく邑美郡丸山に飢饉供養塔が建立されたということがインターネッ トサイト・ウィキペディア「申年がしん」に記載されていた。これらのことから、天保飢饉の供養塔は天保七年以降に建立されたのではないかと推測される。無駄安留記は安政五年（一八五八）に成立した地誌であるから、無駄安留記に書かれている時代にも、おそらく存在したと思われる。供養塔や墓碑を動かしたようには実際に見たところ感じられず、また動かしたとしても動かした場所を道のように作る理由が考えられないため、著者米逸処が歩いた当時の道がそのまま今にも残っているのではないかとも考えられる。登った場所からでも八東川は一〇メートルから二〇メートルは下に見え、無駄安留記にあるように「山巖深淵のいかにも恐ろしい景色」であったと言えるかもしれない。

次に、新興寺の寺領の範囲についての『因幡志』の記述を考えてみる。それによると新興寺の寺領の範囲は東西七五町（約八キロメートル）、南北四〇町（約四キロメートル）というとてもなく広い寺領であり、東は金峰金剛山峰得丸私都堺、西は大谷鼻横道屋井江上町堺、北は西搭鷺倉峰津黒堺、そして南は確かに武石八東川之小別府堺であった。現在の新興寺の寺領範囲よりもはるかに広大で、その限南が竹石であると書いてあることから、竹石は「往古新興寺の境内なりし由」という無駄安

留記の記述は誤りではないと考えられる。

本文の最後に

おそろしき虎の住べき竹石は

若さのじやより人もおぢけり

という狂歌が出てくる。これを現代語訳すると、「恐ろしい虎の住んでいるような竹石は若桜の蛇よりも人が怖気づく」となる。この「竹と虎」の組み合わせは中国の水墨画などによく出てくる。この中国文化が日本に伝来し、無駄安留記が書かれた時代に近い浮世絵などにもこの「竹と虎」の組み合わせを見ることが出来る。このことから、筆者も竹石の竹という字に虎をかけて狂歌に登場させたのだと考えられる。また、「若さのじや」の蛇については、若桜には「蛇切り淵の話」という大蛇退治の伝説があることが『稲葉民談記』に載っており、無駄安留記拾遺参もそれを紹介している。若桜鬼ヶ城主が矢部山城守であったときの話であるとされる「蛇切淵の話」は、次のようなものである。

若桜鬼ヶ城主が矢部山城守であったとき、若桜町糸白見の八東川上流にある淵に住んでいた大蛇に人々は恐れをなしていた。山城守の家来たちが退治しようと時をねらっていたが、大蛇はなかなかあらわれなかった。ある日、腕に覚えのある侍が「もしいるならすぐに出てこい」と大声で叫ぶと、小さな蛇が出てきた。侍がこの小蛇を切りつけると、小さな蛇は大蛇となり、淵はのたまわる大蛇の血で赤く染まった。この蛇は十四、五間（約三〇メートル）もあった。この大蛇の骨は、長くこの淵に残っていたが骨の周りは餅つき白ほどの大きいものであったという。しかし文禄年間の大水で流れてしまったという。そのときから、この淵

を蛇切淵という。(参考『若桜郷土読本』・『因伯昔ばなし百選』)

「若桜鬼ヶ城主が矢部山城守であったとき」とは、正確な年号は分らないが一五〇〇年代である。また、「文禄年間」は文禄元年(一五九三)から文禄四年(一五九六)の間を言う。どちらにしても、無駄安留記の成立年安政五年(一八五八)よりもはるかに昔のことである。この伝承を著者米逸処が虎の比較として思いつき登場させたということが考えられる。

私が初めに調査に行ったとき、まだ本文の訳以外はまだ調べておらず、その上道路の工事によって岩頭を川を挟んで向う側から見るということになり「なんとまあ地味な景色」だと思った。しかし、調査を進めてからまた実際に立ってみるとまた違った景色が見えた。私たちは知らない間に、歴史的な名所を通り過ぎてしまっているのかもしれない。今回の調査によって、鳥取の景色を見直すきっかけになった。

(深内 くるみ)

【参考資料】

『鳥取県史第3巻 近世政治』一九七九年

ウィキペディア「申年がしん」 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%94%B3%E5%B9%B4%E3%81%8C%E3%81%97%E3%82%93>

Kotobank.jp (世界大百科事典第二版)「天保の飢饉」 <http://kotobank.jp/word/%E5%A4%A9%E4%BF%9D%E3%81%AF%E9%A3%A2%E9%A5%89>



山崎橋付近の地図。矢印の先が山崎橋。(Google mapより作成)

山寄算盤橋

山寄算盤橋は、若桜街道（現在の国道二九号線）と八東川が交わる場所に掛けられた橋である。『歴史の道調査報告書』によると、無駄安留記当時の若桜街道と現在の国道二九号線は、多少のずれがあるものの、山崎橋付近はおおむね一致している。無駄安留記には「山寄橋」と表記されているが、この報告書では以降は表記を山崎橋で統一する。

無駄安留記には山崎橋について、次のように記されている。

山崎算盤橋 往古は涉舟なりし。安政の年間若櫻の富民某、御許しをか、ふりて造ると。

これを現代語訳すると「山崎算盤橋 昔は船で渡っていたところである。安政の間（二八五三〜一八五九）に若桜の金持ちの誰それが藩の許しを得て造った橋である」となる。山崎橋のある若桜街道（国道二九号線）は江戸時代主要な街道として使われていた。人の往来も多かったと思われる。無駄安留記本文にあるように、若桜には「富民某」がいた。推測になるのだが、この人物は鳥取藩からの要請を受け、若桜街道に橋を建設したのではないだろうか。また、

若桜街道の通行人やそこに暮らしている人から、橋を建設してほしいという要望があったのかもしれない。

無駄安留記の中で山崎橋は次のように歌われている。

桁数はいくらあるかは白波の

上に掛けたるそろばんのはし

この狂歌を訳すと「桁数はいたいほどあるのだろうか。川の上に掛けたそろばんのはし。」となる。「白波」は「知らない」と掛けられた掛詞である。ここでは、「いくらあるのか知らない」を「いたいほどあるのだろうか」と訳した。

歌の中には「そろばんのはし」という単語が出てくる。「そろばんのはし」（そろばんばし）にはどんな意味があるのか。まず一つに、橋の形態が挙げられる。引橋と呼ばれる橋の種類の一つにそろばん橋がある。引橋とは『広辞苑（第六版）』によると「橋板を取り去って桁だけが残るようにした橋」とあり、『図解橋梁用語辞典』によると「橋の古い呼び名の一つで、通路となる板を取り除き橋げただけを残すことができるようにした橋」とある。その中でもそろばん橋は、『石川新情報書府』ホームページによると、「橋の下部に車輪がついており引き込むことができ

岩国の錦帯橋。五連のアーチが
なる橋。(wikipediaより)



る構造」の橋だそう。また、『大阪市』ホームページの千代崎橋の項目によると、引込式の可動橋となっていたため、そろばん橋と呼んだとある。どちらも、引き込むことのできる可動式の橋、という点が共通している。

もう一つの意味は、山口県岩国市にある錦帯橋を指す言葉としての「そろばんばし」である。『広辞苑（第六版）』によると、錦帯橋の別称として算盤橋、五竜橋が挙げられている。錦帯橋は山梨県の猿橋などともに日本三奇橋のひとつとして知られている橋である。「錦帯橋（岩国市ホームページ）」によると安永年間（一七七一―一七八〇）には錦帯橋という名前は広まっていたものの、錦帯橋という名前が公式名称として指定されたのは、明治維新後であるとのことだ。それまでは錦帯橋には複数の呼び方があり、その一つとして算盤橋という呼び方があったという。また錦帯橋は、再建された延宝三年（一六七四）以来二七六年間流出することがなかったという。

無駄安留記の絵を見ると、山崎橋はアーチ状の橋が描かれており、引き込むための装置は見当たらない。このことから橋の形態を指す言葉として「そろばんのはし」が用いられたとは考えにくい。したがって、錦帯橋を指す言葉として「そろばんのはし」が用いられたのではないだろうか。無駄安留記が、因幡の名所を巡って書かれたものであるということ、無駄安留記が成立した安政五年（一八五八）に、錦帯橋は一八三年間流失しなかったことから、山崎橋は錦帯橋のように立派な橋だ、と賛美する意味でつかわれた言葉ではないだろうかと思われる。また、当時の橋は水害で流失することが多かったため、錦帯橋が長寿の橋であることから、山崎橋も錦帯橋のように長持ちしてほしい、という作者の願いが込められているのではないだろうか。



無駄安留記に描かれた山崎橋の絵と現在の山崎橋の写真を比較すると、共通点が二点あげられる。一つ目は大きく山肌の露出している所があるということ。二つ目は山のすぐ手前に川が流れていることだ。この二点と橋との位置関係が似ていることから、現在の山崎橋がかかっている場所とほぼ同じところに無駄安留記の山崎橋がかかっていたのではないかと思われる。また、現在の山崎橋付近に水難地蔵がある。水難地蔵というのは渡し船など水に関係あるところで、水難から守ってくれるように祈って作られる地蔵である。『歴史の道調査報告書』によると山崎の水難地蔵は高さ一四〇センチメートルで、正面には地蔵の浮彫と「為水難守護也」の文字が刻まれているという。文化十三年（一八一六）に造られたようである。水難地蔵の場所が変わっていないと仮定すると、先に挙げたように、山崎橋が同じ場所にあったのではないかと考えられる。

異なっている点としてあげられるのは、現在では無駄安留記に描かれていた祠のようなものが見当たらないことである。現在では無駄安留記に描かれていたと思われる山は採石場になっており、かなり大きく山が削られている。無駄安留記に描かれていた祠は現在の採石場を作るにあたって移転したのではないかと考えられる。

今回の調査で私は無駄安留記の山崎橋と現在の山崎橋が同じ場所にあったのではないかと結論に至った。しかし、調査の段階では、山崎橋は違う場所にあったのではないかという意見もあった。そのことについて少し触れておきたい。現在の山崎橋から見える風景よりもさらに東側によく似た風景がある。八頭町と若桜町の境にある千石岩とその付近の用呂橋を山崎橋と重ねたのではないか、という意見が無駄安留記隊

現在の山崎橋



隊員から出された。また、山崎橋から西側にある富枝橋と間違えたのではないか、という意見もあった。しかし私は、現地調査と絵に描かれている山肌の見える部分と橋との関係などを総合的に考えた結果、先に挙げたように無駄な留記と現在の山崎橋は同じ場所にあったという結論に至った。

【参考資料】

(佐々木 裕都)

佐伯彰一(編)『図解 橋梁用語辞典』山海堂、一九八六年

鳥取県教育委員会文化課（編）『鳥取県歴史の道調査報告書』——第4

集 若桜街道』鳥取県文化財保存協会、一九九〇年

石川新情報書府 http://shofu.pref.fishikawa.jp/impaku/castle/index_j.htm

大阪市 <http://www.city.osaka.lg.jp/>

錦帯橋(岩国市公式ホームページ) <http://kintaikyo.iwakuni-city.net/>



若桜驛龍徳寺

無駄安留記本文にはこう書かれている。

若桜驛 龍徳寺 左馬頭行盛位牌

まず若桜は『因幡志』によると、後醍醐天皇が伯州からの道中に、若木の櫻に花が咲いているのを見て、若桜と言ったことで地名となったとある。また、若桜驛は宿駅である。宿駅とは、街道の要所で、旅人の宿泊や、荷物運搬の人馬を中継ぎする設備のあった場所である。

龍徳寺は、現在の八頭郡若桜町若桜に位置している。山号は萬祥山、宗派は曹洞宗である。『鳥取県古社寺百選』によると、龍徳寺は、享祿二年（一五二九）に用呂村に建立された曹洞宗の堂宇が起源とされ、天正年間（一五七三～一五九一）には高野村に移されて石頭院と称されていた。慶長七年（一六〇二）に若桜鬼ヶ城の城主である山崎家盛が山崎家の菩提寺と定めて現在地に移し、父の山崎堅家の法号と同じ現在の寺号に改めたと伝えられている。境内には山崎家盛の墓（元和三年五月十八日の銘）があり、同じ基壇の上には十数基の五輪塔が祀られている。しかし、平行盛に関するものは現存していない。

「左馬頭行盛」は、平行盛を指していると思われる。平行盛は、生誕は未詳で、平清盛の次男である平基盛の長男である。基盛が早世した後、憐れんだ伯父の平重盛によって養育され、平家一門の栄達にともない正五位下に昇叙し、播磨守、左馬頭となった。治承・寿永の乱の期間



(二一八〇～二一八五)においては、俱利伽羅峠の戦い、三草山の戦い、藤戸の戦い、屋島の戦いなどに参加した。特に藤戸の戦いにおいては、大將軍として佐々木盛綱率いる源氏方と対戦した。元暦二年(一一八五)三月に、壇ノ浦の戦いにおいて最終的な敗北を喫し、従兄弟の資盛、有盛とともに、『平家物語』では入水自殺、『源平盛衰記』では討ち死にしたと伝えられている。

一方で行盛は藤原定家に師事し、歌人としても名高かった。都落ちの際に自身の詠草を定家に託して、その包み紙に書かれた和歌は後に新勅撰和歌集に入集している。

また、奄美大島の龍郷町には、壇ノ浦の戦いで行盛一族が落ちのび戸口にたどり着いたという平家落人伝説があり、行盛を祀った行盛神社がある。

平家落人伝説は、若桜町内各地にも残っている。『鳥取県伝説集』によると、落折には、平清盛の弟である経盛一行が落ちのびてきたという伝説があり、現在でも全戸「平家」という苗字である。岩谷堂地区には、その経盛一族の墓が存在すると言われ、春米にある春米神社には経盛が祀られており、春米には平家の子孫が住んでいると言われている。しかし、『因伯のみやしろ』には以下のようにある。

春米神社は創立年代不詳で、氷ノ山の山頂に鎮座し須賀神と称し、因幡国八東郡、但馬国七味郡、播磨国宍粟郡、美作国吉野郡の総社として鎮座する。春米村の代表が、御神体を本殿の扉に載せて下山奉遷して蔵王権現と称し春米村の氏神としたと伝わる。山上には諸社殿の礎石が現存する。弘化二年(一八四五)本殿を再建。明治元年末社前生土神(春米の祖神、伊香色雄命)、稻荷神(倉稻魂命)、



龍徳寺

山ノ神（大山祇命）、瀧ノ神（瀬織津姫命）を合祀し春米社と改称し、さらに明治六年（一八七三）に春米神社と改称した。

このように、『因伯のみやしろ』には平家に関する記述は見られない。しかし、各地に色濃く伝承が残っていることがわかった。また、これらの平家落人伝説の中に、平行盛に関する記述は残っていないかった。

次に、無駄安留記にはこのような狂歌や絵が書かれている。

若桜 今もあるじを忘れずて

散ればさながら ゆきもりとなる

これを現代語訳すると、「若木の桜は、今でも主を忘れていない。その桜が散れば、まるで雪のように降り積もる（だろう）」となり、春の桜を歌っている。

龍徳寺の後ろには山があり、手前には橋が描かれている。これは、現在の龍徳寺周辺にも残っており絵と一致するので、描かれた時からあまり街並みが変わっていないことがわかる。龍徳寺も、絵とほぼ変わらない姿で残っていることがわかった。また、屋根や山に雪が積もっており、作者と思われる人が、蓑や笠を身につけている。歩いてきた道には雪による足跡が残っていて、雪が降り積もる冬の光景が描かれていることが見て取れる。このように無駄安留記内で、雪が描かれていることは大変珍しい。また、狂歌と絵の季節が違うが、それは、狂歌の中の「ゆきもり」に、平行盛と雪の降り積もる様子をかけることで、狂歌と平行盛の関係性を強調したのではないか、と思われる。



山崎家盛の石塔

今回の調査で、若桜町内や龍徳寺に平行盛に関する遺跡や遺物、伝承が残っていないことがわかった。このことから、当時は行盛に関するものがあつたのかもしれないが時代とともに忘れられた、もしくは、作者が、山崎家盛の墓を行盛のものと思い違いしたと考えられる。しかし、当時、行盛に関するものが全くなかったとすれば、作者が龍徳寺と行盛を関係付けて詠むこともなかったと思われるので、当時は行盛に関するものが何かしらあつたのだろうと考えられる。このように、今では文献に残っていない、人物や伝説を知ることができるところが、無駄安留記の面白さの一つなのだと思う。

(高磯 麻実)

【参考文献】

- 鳥取県神社誌編纂委員会(編)『因伯のみやしろ——新修鳥取県神社誌』
鳥取県神社庁、二〇一二年
- 野津龍『鳥取県伝説集——因幡編(上)』山陰放送、一九八九年
- 吉田正『鳥取県古社寺一〇〇選』牧野出版、一九七六年



『因幡志』より

みくら 屯倉弁財天巖

屯倉弁財天巖は、鳥取県八東郡若桜町の南西方向にある三倉から、弁天谷川に沿って進んだ山奥にある。現在三倉と表記される屯倉は、本来「みやけ」と発音し「大和政権の直轄領から収獲した稲米を蓄積する倉。転じて、その直轄領（『広辞苑』）を意味し、『因幡志』に「今当村を三倉と云うは屯倉をミクラと誤りて終に三倉と轉書せしならんか」とあるように、誤読によって三倉と表記されるようになったと考えられる。

無駄安留記の「屯倉弁財天巖」は現在、『因伯のみやしる——新修鳥取県神社誌』によると、大正五年に、虎石神社と池谷神社、そして弁天神社（旧弁財天）を合祀して江島神社となっている。そのとき社殿が旧弁天神社境内に建てられたということである。また昭和七年に拝殿が建立された。以前は、『因幡志「辨天岩」』の

絵のように、石灯籠があるのみで、御神体の大岩がそのままに見える、という様子だったようである。無駄安留記中の絵には小さな祠とコモリ堂が描かれ、本文にもその様子が記述されてあることから、無駄安留記の作者が訪れたときには、『因幡志』と異なった景色があったのだろう。

われわれ無駄安留記隊が現地で見ताものは江島神社として合祀された姿であったため、建物などは随分変わっていた。だ

が、無駄安留記の絵と現在の建物の配置はほとんど変わっておらず、作者が訪れた当時の屯倉弁財天を思うことができた。また『因幡志』の絵にはあった石灯籠が現在どこにあるのかは不明であるが、道中にもいくつかの石灯籠が見られた。そのいずれかに紛れているという可能性はあるのだが、明治以降に設置されたものが大半であると思われる。

次に無駄安留記の記述について見ていく。無駄安留記の本文で、作者は屯倉弁財天巖について次のように記している。

同 屯倉弁財天巖 村より登ること 町余。幽谷に大巖在。是神体なり。前に小禿倉を置。往古は諸人に器物を貸たまひし由。

現代語訳すると、「同じく八東郡 屯倉弁財天巖 村から 町余り登った奥深い谷に大岩がある。これは御神体である。その御前に小さな祠が置かれている。昔は多くの人々に器物をお貸しになっていたということである。」という意味になる。





図1

「村から」と「町余り」の間には二文字分ほどの空白があり、作者が意図的に空けたものであると考えられ、続く文章が「町余り」とあることから、この部分には距離を表す数字が入る予定だったと推測できる。「江島神社」（『八頭郡誌』）には次のように書かれてある。

三倉の南枝谷の奥にあり。大工村にある石の鳥居より、一町々々に石地蔵を安置して道の誌とす。十八町許り奥谷の左の方に飛泉あり。其石の方少し偏卑なる処に、高さ二丈余り周囲五六十間の孤岩あり前に楯の太木あり。

無駄安留記の本文よりも詳しく書かれてあり、『八頭郡誌』の「十八町許り奥」という文章は無駄安留記の記述にある「町余り」と同様の文脈であることがわかる。このことから「十八」とであると推測できる。また、無駄安留記隊で現地を訪れたとき、われわれは徒歩で登っていたのだが、その道中に目的地まで二キロという看板があった。二キロとはおよそ十八町のことであるから、見当外れの推測ではないと考える。

無駄安留記本文にある「往古は諸人に器物を貸したまいし由」という文章の「器物」が何を意味しているのかは不明である。無駄安留記以外の資料に「器物」についての記述がないためである。

次いで、無駄安留記には次のような文章がある。

屯倉ハ推古十五年七月諸国ニ屯倉ヲ置ト

推古十五年とは西暦で六〇七年のことである。この文章は作者が補足的に書き加えたものであると思われる。作者が明治時代になってから書いた無駄安留記拾遺巻と筆跡が共通しているからである。また他の文章では平仮名が用いられているのに対して、この文章では片仮名が用いられており、作者が意図的に使い分けられていると考えられる。

次に、無駄安留記には次のような狂歌が記されている。

うつくしきその御姿にならべては

みくらべられぬ岩の形かな

これは「弁財天の美しい御姿とは並べて見比べられない屯倉の岩の形だなあ」と解釈できる。「みくらべられぬ」の「みくら」は掛詞になっ

ている。無駄安留記の絵を見ると、作者の言う通り、大岩はごつごつとして、弁財天のおやかなイメージと対極にあるような姿である。現地で調査したときは、拝殿がまず目に入り、後ろへ回ってみなければ大岩の姿を見ることができず、作者ほどの驚きはなかったのだが、しかしその威容はなるほど作者の狂歌の通りで、弁財天とは見比べられない岩の形である。図1は社殿と御神体である大岩の写真である。社殿によって半分ほど隠れているため、大岩の大きさが伝わりにくいのが残念である。図2は背後からの写真である。逞しい背中を思わせる形と大きさである。この写真で社殿や拝殿を見ることができないことから、大岩の威容がよくわかると思う。

古代のひとは自然にある山や木、岩などに神が宿っていると信じ、信仰の対象としてきた。屯倉弁財天巖も同じような理由で古くから信仰を受けてきたのだろうと考えられる。『因幡志』には次のようなことが記されている。

諸人辨財天と称して崇敬すること甚し。毎年九月巳の日祭りて諸方より参詣す。或は雨を祈りし年には七月巳の日雨乞躍りて郷中の男女来りて謡躍をなす。何の世に始まりしにや久しき事なりとぞ。

「人々は弁財天と呼んでたいへん崇敬していた。毎年九月の巳の日に祭りをして、様々な地域から人々が参詣する。或は雨を祈った年には七月の巳の日に雨乞い踊りといって、郷中の男女が来て舞い踊った。いつの時代に始まったのだろうか、長く続いていることであるという。」と解釈できる。

『因伯のみやしる』によると、「若桜城主であつた矢部、木下、山崎の

三家の祈願所とされ、近世に至り池田家の尊信特に篤く近郷民衆の崇敬を集めた」とあり、「盛時は数千人の参拝者があつた」と記されている。歴代の有力者からの尊信が篤く、近郷の民衆も熱心に信仰していることがわかる。

また『因幡志』に「何の世に始まりしにや久しき事なりとぞ」とあることから、弁財天が祀られるようになった起源は『因幡志』が書かれた年代よりさらに古いようである。しかしそれとは別に、『因幡志』には載っていないものの、口碑として残る起源の伝承がある。「江島神社」（『八頭郡誌』）に次のように記されている。

往古治承の頃、平清盛杵島姫を江ノ島に分祭す。文治の頃、師盛



図2

本村に往し、江ノ島及宮島の遙拝所を此処に定む。是より人民信從して杵島弁財天を勧請し、小社を建つ。

「昔、治承の頃、平清盛が杵島姫を江ノ島に分祭した。文治の頃、師盛が本村（屯倉）にやって来て、江ノ島及び宮島の遙拝所をこの場所に定めた。それから人々は信仰し、杵島弁財天を勧請し、小さな社を建てた」と解釈できる。治承とは一一七七年から一一八一年までの期間であり、文治とは一一八五年から一一八九年までの期間を指す。

「平清盛杵島姫を江ノ島に分祭す」という文章にある「杵島姫」とは厳島神社の祭神の市杵島姫命のことであると思われ、市杵島姫命とは弁財天と神仏習合し本地垂迹において同神とされた日本神話の水の神である。そして弁財天は平家の氏神でもある。

「師盛本村に往し」という記述にある師盛とは平重盛の五男、小松備中守平師盛である。『平家物語』では、寿永三年（一一八四）の三草山の戦いに敗れた後、一ノ谷の平家本陣に合流し、続く一ノ谷の戦いにおいて、大輪田泊にて戦い討ち死にしたと伝わっている。口碑に従うならば、師盛は三草山の戦いに敗れた後、一ノ谷の戦いに参戦せず、屯倉へ落ち延びたと考えられる。

また『若桜町誌』によると、元暦年中（一一八四～一一八五）に「小松重盛の子、師盛、落ち来り、子孫分家して三倉村を起こす」とあり、杵島弁財天を勧請し、さらに子孫が分家し村を起こしたというのである。さらに建久二年（一一九一）には「師盛、三倉村にて死去」とある。要するに、屯倉へ落ち延びた師盛はその地で死去し、師盛の子孫が分家して三倉村を起こしたということである。

屯倉弁財天巖が信仰されるようになった起源が師盛の弁財天の勧請か

らであると断言することはできないが、現在まで弁財天の岩として信仰されていることは確かである。また、平家の落人伝説が三倉村においても残っていることがわかった。

われわれは二度、屯倉弁財天巖を調査に訪れたのだが、一度目のときは道幅の関係でチャーターしたバスが入らず、徒歩で登ることになって非常に苦労した記憶がある。空は曇っていたが夏という季節であったために蒸し暑く、ひたすら無心で登った。しかし杉林の山道から参道に入るとまったく空気が変わるのを感じた。傍を流れる小川のせいか、籠って沈んだような空気がひんやりと冷たい空気に変わったのである。しかし小川による冷気だけではないと感じた。そこに神聖さを感じ取った。多くの人が崇敬し、諸方から参詣した理由がわかったように思われた。無駄安留記の作者も同じように小川のせせらぎを耳にし、同じように空気が変わるのを感じたのではないかと思い、愉快に感じた。観光に訪れるには是非とも車輛を用意したい場所にあるが、苦勞して参詣するだけの価値はあると思う。

（板持 尚幸）

【参考資料】

鳥取県神社誌編纂委員会(編)『因伯のみやしる——新修鳥取県神社誌』

鳥取県神社庁、二〇一二年

「七福神（弁財天）」 http://www.geocities.jp/mitaka_makita/kaicuu/benzaiten.html

すすみ 次澄山中不動巖

須澄は、国道二九号線沿いに位置している。そして無駄安留記に出てくる不動巖は、八東川に流れ込む川の上流付近の高く険しい山の中にある。『因幡志』によると、安政五年（一八五八）の村々生高竈数取調帳では生高一五二石余、竈数二八と書かれており、小さな村であったことがわかる。なお、無駄安留記には、「次澄」と書かれているが、ここでは「須澄」と表記する。

では、無駄安留記本文と狂歌をみていく。

須澄山中 不動巖 予想ふに是不動愛染

是巨勢金岡が画なりと村より登ること凡十八町峻岨を経て横途を行て生樹門をくぐり岩をたどり樹を挙りて漸岩下に到る仰ば岩嶋の尖頭三所に朱色僅に残れり星霜を経たる形岩下を臨ば千仞の壁巖危く脚もふるふばかり向ふを望ば青嶂の間に飛泉登竜のごとく絶景言語に盡がたくなかく筆を投すべし

動かざる仏を岩に書置て

きゆるもかたき金岡が筆

現代語訳は「須澄山の中の不動巖 私が思うには不動巖は不動明王と愛染明王が描いてある。これは巨勢金岡の絵であると伝わっている。村から登ることおよそ一八町（約二キロメートル）。高く険しい山を経

て横道に入り生樹門をくぐり、尾根伝いに歩き樹を行き過ぎてやっと不動巖の下に到着する。見上げれば、高く険しい山の尖った辺りの部分三ヶ所に朱色が少し残っている。歳月を経ている形だ。不動巖の下を望むと非常に高い岩壁で危なく、足も震えるばかりだ。向う側を望めば青い山々の間に滝があり、昇り竜のように見え、その絶景は言葉で言い表しがたいほど素晴らしく、かえって筆を投げ出してしまいたい」となり、狂歌の現代語訳は、「動かない仏、不動明王を岩に描き置いているが、金岡が描いただけあって、鉱物のようにかたく消えることも難しい」となる。

また、無駄安留記の絵には、険しい山を登ってきた二人の人物が書かれている。上の方には不動と書かれており、朱色の箇所がある。そして、向こう側には滝がある。この本文と絵から私は①不動巖、②巨勢金岡、③滝に注目して調べたことを報告していく。



① 不動巖

無駄安留記には、「岩巖の尖頭三所に朱色僅に残れり星霜を経たる形」とあり、絵(図1)ではその箇所を朱色で表している。しかし、後述するが、不動明王は描かれていない。一方『因幡志』には、「岩頭尖りて火焰の如く」(岩の辺りが尖っていて燃え上がっているようだ)とある。また、『因幡志』の絵(図2)には「丹色」と書かれていることがわかる。丹色とは赤色という意味である。しかし、『因幡志』の場合は草木が繁茂していた為にはつきり見ることができなかったと記述されている。つまり、無駄安留記と『因幡志』を比べると、前者の方が不動巖を実際に見て書いているのがわかる。

福山繁氏から提供していただいた写真(図3)では、かろうじて朱色の箇所を一ヶ所確認できた。聞き取り調査では、草木が繁茂しているため、無駄安留記当時の風景を見るのは困難だと思われる。

次に、不動巖に描かれていると言われる不動明王、愛染明王について述べていく。聞き取り調査によると「不動巖には不動明王が描かれているのではなく、朝日が朱色の箇所に反射して不動明王に見える」ということである。つまり、不動明王とは朱色の箇所に朝日が反射して、光って見える幻影なのである。また愛染明王に関して、『因幡志』には記述はない。また、聞き取り調査でもそのようなものを見た人はいないようである。つまり、愛染明王は著者逸処だけが記したものであろう。さらに不動明王に関して『因幡志』には以下のような伝承が残っているので紹介しておく。

土俗云ふ日に映すれば光明あり是眼中に黄金を鏤む故なりと

現代語訳は「村の伝承では、日に反射すれば輝く。これは眼中に黄金を鏤められているからだとしている」となる。しかし、実際は不動明王は描かれてはいない。不動巖の朱色の箇所は、『若桜町誌』によると「鉄分を含み赤くなった岩石」としている。つまり、無駄安留記当時の人々は、朱色の箇所に朝日が反射して光って不動明王の幻影が見えたのである。

② 巨勢金岡

巨勢金岡は生没年未詳だが、九世紀後半に活躍した平安時代前期の宮廷画家である。また、唐絵の影響を脱した大和絵の様式を確立させた功労者とされている。私が、注目したことは金岡が描いたと認められる作品が現存していないにも関わらずに後世に名を残していることである。

この理由は、巨勢金岡の名は貴族の日記や多くの文献、説話集に出てきており、全国各地に巨勢金岡の作品だと言われているものが伝わっているからだ。例えば、倉吉市の長谷寺に奉納されている「天文十八年白馬之図」があり、鳥取県内にも巨勢金岡に関わるものが伝わっている。次に、なぜこのような辺境の地に言い伝えが残っているのかである。この理由は、『因幡志』の著者安部恭庵は以下の記述がヒントになる。

如何なる故にてかゝる邊地に來れるにや不思議なり雪舟曰く凡そ名勝の地山川草木の絶景は皆我師なりと又狩野法眼元信は諸国行脚をめぐらし山水の勝境を訪ねて胸臆の蘊をひらかんと欲し自ら籐匣を負ひ畫具を納めて深山幽谷に至り筆跡を遺せりと云ふ是達人其術を研くの習なければ金岡の名を此の邊地に傳るも亦疑ふべきにあらずるなり



図1 無駄安留記より



図2 『因幡志』より

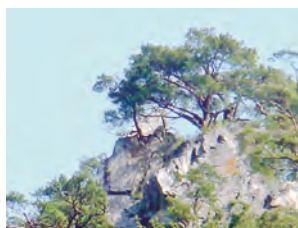


図3 不動巖

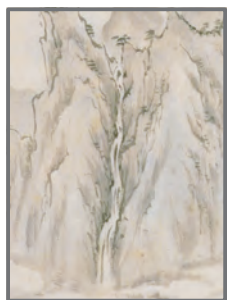


図4 無駄安留記より

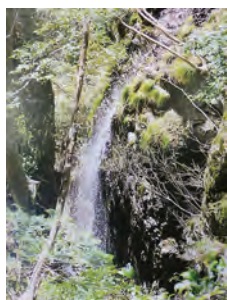


図5 滝

無駄安留記では、「飛泉登竜のごとく絶景言語に盡がたくなかく、筆を投すべし」というように滝(図4)を見て絶賛している。『因幡志』には滝についての記述を確認できなかったが、滝が存在することは間違いない。場所の特定は至っては無いが、写真がそうである。この写真(図5)も福山繁氏からいただいたものである。この滝は大雨の直後に撮られたものだというのである。つまり、私は大雨の直後のあふれた水

③ 滝

現代語訳は「どういう理由かこのような辺境の地に來たのかが不思議だ。雪舟曰く、およそ名勝の地山川草木の絶景はすべて我の師匠である。また狩野法眼・元信は、諸国行脚をめぐるし山水の勝境をたずねて心の中の奥低を開き、自ら藤で作られた箱を背負い、画具を納めて深山幽谷に至り筆跡を残したという。これは、達人がその術を研く習わしなので、金岡の名が辺地に伝わることを疑うことはない」となる。つまり、不動巖がある山には、絵の達人が訪れるような光景が広がっているという誇りが言い伝えを生じさせているのではないか。

が偶然にも激しい流れを作ったのではないかと考えている。無駄安留記の場合も、大雨の直後に出来たのではないかと考える。

以上、不動巖には巨勢金岡が描いた不動明王が伝わっている。しかし、実際には描かれているのではなく、朝日が朱色の箇所を反射することで見えることがわかった。また、巨勢金岡の作品だと言われている伝承は全国各地に残っており、ここ鳥取県にも伝わっていることがわかった。不動明王は朝日がちょうど不動巖の朱色の箇所を反射しなければならぬので見える機会は多くないと思われる。そのためにこのような神秘的な現象に人々の信仰を集めたのではないか。つまり、須澄の人々はこの不動明王を信仰していたと私は考えている。さらに、須澄を代表するものであり、誇れるものと言えるのではないか。私は文化を形成する上で、この不動明王が須澄の人々の意識の中に内在化していると考ええる。そして『因幡志』などの文献には記述がなく場所も特定できないが、著者逸処は滝を見て絶賛していることから、不動巖近くに美しい滝があったことがわかった。

最後に、残念なことに今回、不動巖も滝も実際に自分で見る事ができなかったが、岩村義秋氏、匠の館の館長・門村正行氏、そして福山繫氏のお世話になった。門村氏には須澄に伝わる伝承などについてのお話を伺った。岩村氏は実際に山に登られ近くで不動巖の写真を撮られた方である。福山氏は岩村氏とは違う場所で写真を撮られ、遠くからの不動巖の姿を見ることができた。御二人が撮られた写真をご厚意で提供していただき、調査を進めることができた。ここにお礼申し上げます。

(西村 祐亮)

【参考資料】

日本百名人 http://nihongaka.jp/a_ka_mejin.html#koseno

倉吉観光情報 <http://www.apioner.or.jp/kankou/html/history2.htm>

ウキペディア「巨勢金岡」 <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B7%A8%E5%8B%A2%E9%87%91%E5%B2%A1>

窟堂

岩屋堂は現在の八頭郡若桜町岩屋堂に位置している。現在は「岩屋堂」と表記されているが、無駄安留記では「窟堂」と書かれている。これはどちらも同じ意味であるので、以下は「岩屋堂」と表記する。

岩屋堂は昭和二十八年（一九五二）に国の重要文化財に指定された。岩屋堂の収まる岩窟は間口約七メートル、高さ約一三メートル、奥行約一〇メートルあり、堂は正面三間（五・四メートル）、側面四間（七・二メートル）、屋根は前方が入母造で後方は切妻造となっている。

無駄安留記には岩屋堂について次のように記述されている。

同 窟堂 妙見山神光寺 黒皮不動尊 空海三十三の作なり。往古は大伽藍なりしが天正の兵火に灰燼となる。今も堂の傍に常峯院として修験是を守る。堂は飛騨工の作なり。

とある。これを訳すと、「同（八東郡） 岩屋堂 妙見山神光寺 本尊は黒皮不動尊で、空海が三十三歳の時に作ったである。むかしは大伽藍であったが、天正の兵火によって灰燼と化した。今も堂の側には常峯院という名の修験者が堂を守っている。堂は飛騨工が建築したものである」となる。

無駄安留記の「黒皮不動尊空海三十三の作なり」という記述は『因幡志』にも記載されており、『因幡志』では本尊の黒皮不動尊（長二尺焰炎三

尺餘座像）は、空海が三十三歳の時に制作したものとされている。

神光寺とは、岩屋堂の本寺のことである。神光寺の山号は妙見山という。『因幡志』では、神光寺は七堂（金堂・講堂・塔・食堂・鐘楼・経倉・僧坊）の伽藍であり、神光寺という名は伽藍の創建者である神光という名の修験者が由来となっている。『岩屋堂略年表』（若桜郷土研究会編）によると神光寺の七堂伽藍は、弘仁二〇年（八一九）に建立され、天正九年（一五八一）に兵火によって焼失している。その後、寛政七年（一七九五）に神光寺は廃跡となった。

先程も述べたが、神光寺は大伽藍であった。その伽藍は、天正九年に羽柴秀吉の因幡侵攻中に兵火によって焼失し、現在の岩屋堂の姿のみになったとされる。常峯院という修験者は、『因幡志』によると、鳥取善祥院の同行のことである。おそらく、無駄安留記の作者が岩屋堂を訪れた当時、常峯院という修験者が神光寺であった場所に居を構えていた、ということなのであろう。不動院岩屋堂は大同元年（八〇六）に草創されたと伝えられている。その際に飛騨工が建築を手がけたとされている。



飛驒工というのは、飛驒の国から都に行き、そこで主に木工寮という部署で公役していた工匠のことである。また、名匠のことを総称として飛驒工と指す場合もある。しかし、無駄安留記の作者がどちらの意味で飛驒工の作と記述したかは定かではない。

無駄安留記には続けてこのように記述されている。

敦盛の墓今は馬頭観音と云誤る。堂の側に祠あり。子安権現妙見宮は華門の内に鎮座。経盛一族の古墳は後園の小高き處に在り。経盛田といふもあり。大同元草創なり。

訳すと、「敦盛の墓は今、馬頭観音として誤って伝えられている。子安権現のまつられている妙見宮は鳥居の内に鎮座なさっている。経盛一族の古墳は堂の後ろの小高い場所にある。経盛田というものもある。大同元年の草創である」となる。

最後の大同元草創というのは、先ほど述べた岩屋堂の創建のことである。この一文は筆跡からみて無駄安留記の作者が、後に書き加えたものであるため、最後に来ているのである。

「敦盛の墓今は馬頭観音と云誤る」という記述は、『平家物語』にも登場する平清盛の弟経盛の息子である無官大夫平敦盛についてのことである。平敦盛は『平家物語』を始めとする様々な物語、説話に登場する人物で、源平合戦においては、一の谷の合戦中に若くして討死している。その敦盛の墓が現在「馬頭観音として誤って伝えられている」と無駄安留記には書かれている。『因幡志』によると、小敦盛墓（無駄安留記には「敦盛の墓」「アツモリ社」と表現）は、岩屋堂の前にあり、向かって左に一基の五輪を安置しているとあるが、無駄安留記には五輪の事は

文章にも登場せず、アツモリ社と書かれた箇所にも五輪は描かれていない。『因幡志』には続けて、これはもともと、山下の畑の中にあつたのを移したと書かれている。さらに、敦盛の墓が馬頭観音と誤って伝わっていることに関しても『因幡志』は次のように言及している。これは敦盛の愛馬の墓として崇められているのではないだろうか。もしもこれが馬頭観音であるのであれば、なぜ敦盛の名を冠しているのか疑問となる。さらに、一の谷の合戦で討ち取られた敦盛の首は父の経盛のもとに送られたということ、埋葬されていたものの中に短刀が出てきたということなどをふまえると、敦盛の馬の墓とも思えず、馬頭観音と呼ぶことによつて馬の墓と言ひ伝えられたのだろう、と。無駄安留記の作者はこの『因幡志』の記述をふまえて無駄安留記に云誤ると記載したのだと考える。

「堂の側に祠あり」という記載についてであるが、調査の際、岩屋神社の側に祠がまつられていた。なお、堂の側にあるという祠は無駄安留記の絵の中にははっきりと描かれておらず、実在する祠と無駄安留記調査では祠が同一のものであるという確証は得られなかった。

『八頭郡誌』によると、妙見宮は現在岩屋神社として現存している。無駄安留記の絵の中で杉の木に囲まれているものがそうであると考えられる。

次は、「経盛一族の古墳は後園の小高き處に在り」という記述についてである。平経盛は、先ほど述べた平敦盛の実父で、壇ノ浦の敗北により、入水自殺を遂げた平家一門の一人である。経盛一族の古墳は、現在も五輪塔群が存在している。なお、経盛田に関しては場所の特定はできなかった。

狂歌は、



図1 『因幡志』に描かれている岩屋堂



図2 現在の岩屋堂



図3 アツモリ社と無駄安留記の絵には表記



図4 経盛一族の古墳とおもわれる五輪塔

経盛の田は露けくも敦盛の青葉ふきくる風は涼しな

訳すと、「経盛田は涙にぬれていてしめつばいが、敦盛の青葉の笛の音で、吹いている風は涼しい」。

先程も述べたとおり、平敦盛は一の谷の合戦において討死している。平家が若桜に落ちのびたとされているのは一の谷の合戦よりも後である。私の考えでは、経盛田がしめつばいというのは、一の谷の合戦において平敦盛をはじめ、敦盛の兄の経正など息子を大勢経盛は失っているが、失った敦盛たちのことを考え涙する経盛を無駄安留記の作者は思い描いたのではないだろうか。青葉の笛は、敦盛が祖父の平忠盛が鳥羽上

皇より下賜されたものを譲り受けた物である。その笛の音と、吹きくる風の音を無駄安留記の作者は連ねて表現しているのだと考える。

調査の時の岩屋堂はまだ青葉茂る頃であった。岩屋堂の軒から望む若桜の景色というものは、想像を超えて美しいものであった。また、岩屋堂は無駄安留記の絵の中に描かれている寺社や古墳とされる五輪などに現存しているものが多く、無駄安留記成立当時から面影がほとんど失われていないと感じた。

【資料協力・逸話提供】

山根貞郎氏

(井上 美穂)

おわりに

今回の無駄安留記隊の調査で感じた事を述べる。まず、無駄安留記作者が国道二九号線に沿って八東郡の名所を書いているということが印象的であった。書かれている名所・旧跡は点在していたものの、国道二九号線から外れることはなかったのである。

国道二九号線は、若桜から鳥取城下までを結ぶ重要なものであった。若桜からは戸倉峠を越えて播磨へ、吉川の江波峠、若杉峠を越えて播州や作州へ通じることができる。つまり、若桜は無駄安留記成立当時、山陽地方から山陰地方、因幡の国から他の国への行き来にはなくてはならない要地であった。そのため、羽柴秀吉が若桜へ侵攻したのは鳥取侵攻の第一歩だったと考えられる。

八東郡は現在の八頭町、若桜町にあるというのは報告書の冒頭で述べた事であったが、隊員には鳥取県出身の者でも知らない場所や知らなかった伝説があり、調査を通じて知ることができた。また、峯寺薬師堂や三倉弁財天、不動院岩屋堂のように現在も無駄安留記当時の姿を色濃く残しており、無駄安留記の絵と見比べられる場所に対して、山崎橋のように当時の姿を見ることが出来ない場所もあり、当時の風景を写真で収めるという事の難しさを実感した。竜徳寺や岩屋堂のように若桜に伝わる平家伝説が無駄安留記に多く登場しているのも、今回八東郡を調査する上で大きなキーワードになったと思う。竹石の岩頭のある場所は普段であれば気がつかずに通り過ぎてしまうようなところにあり、調査を通して当時作者が通ったと思われる道を実際に歩くことが出来た。そのように作者の足跡をたどることができたことが今回の現地調査

の上で最も大きな収穫であったと考える。

最後に、岩屋堂調査にご協力・資料提供をして下さった山根貞郎様、須澄山不動岩の情報・写真、資料を提供していただいた門村正行様、福山繁様。また、鳥取県立博物館学芸員山下真由美様、鳥取市歴史博物館伊藤康晴様、鳥取市教育委員会文化財課佐々木孝文様には無駄安留記に関する研究について貴重なお話をいただきました。御礼申し上げます。

なお、本編中に明記した参考文献・資料以外に、以下の基本的文献を共通して参考にした。

『因幡志』

『因幡民談記』

『鳥取県の地名（日本歴史地名大系）』

『因伯のみやしる』

『郡家町誌』

『八頭郡誌』

『八東町誌』

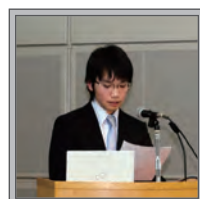
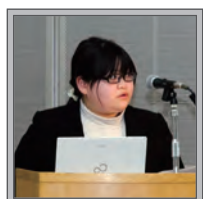
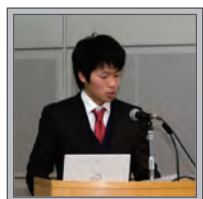
『若桜町誌』

（井上 美穂）



調査の記録





地域文化調査発表会

【開催日】2013年1月26日(土)
【場所】とりぎん文化会館第一会議室

